

中農を満足させるための新経済政策と地方的取引停止の誤り

取引の自由とはどんなことか？ 取引の自由とは、商業の自由であり、商業の自由とは、資本主義への後退を意味する。取引の自由や商業の自由は、個々の小経営主間の商品交換を意味する。マルクス主義のイロハなりとまなんだわれわれは、みなこの取引と商業の自由から不可避的に出てくることは、商品生産者が資本の所有者と労働力の所有者とに分離し、資本家と賃金労働者とに分離すること、すなわち、資本主義的賃金奴隷制が再建されることだということを知っている。こういう再建は、天から降ってくるものではなく、全世界で、ほかならぬ商品的農業から成長してくるものである。われわれはこのことを理論的によく知っている。そしてロシアでは、実生活と小農業経営の条件をよく見まもったものは、だれでもこのことを観察しないわけにはいかない。

まさか、共産党が商業の自由をみとめ、それに移っていけるものだろうか？ そこにはあいれない矛盾がありはしないか？ いうまでもなくこの問題を実践的に解決することは、きわめて困難であると、これにはこたえなければならない。私が予見しているし、また同志諸君と話合っただけでも知っていることでもあるが、割当徴発を税にかえることについての草案——諸君に配布してあるこの草案は、交換を地方的経済取引の範囲内でみとめるという点について、もっとも多くの疑問を呼びおこしているが、こういう疑問は当然であり、また避けられないものである。このことは第八項の終りに述べてある。これはなにを意味するか、その限界はどうか、どうやってこれを実現するのか？ このような疑問にたいして、この大会で答をえようとおもう人があるとすれば、それはまちがっている。われわれはこの疑問にたいする答を、われわれの法律からあたえられるだろう。われわれの任務は原則的方針を確定し、スローガンを提出することだけである。わが党は政府党であり、党大会がおこなう決定は、全共和国にとって拘束力をもつであろう。だからここでわれわれはこの疑問を原則的に解決しなければならない。われわれはこの疑問を原則的に解決し、そのことを農民に知らせなければならない。なぜなら作付は目前にせまっているからである。そのうえで、どうやればよいかを考えるために、われわれの全機構、われわれの理論陣営全体、われわれの実践的経験全体をうごかすべきである。理論的に言って、プロレタリアートの政治権力の根底そのものを傷つけることなしに、そうすることができるだろうか、小農民のためにある程度まで商業の自由を、資本主義の自由を回復することができるだろうか？ そういうことはできるだろうか？ それはできる。なぜなら、問題は度合にあるからである。もしわれわれがわずかの量であっても商品を手にいれることができ、それを国家の手に、政治権力をもつプロレタリアートの手にたもっておき、これらの商品を流通させることができるならば——われわれは、国家として、自分の政治権力に経済的権力を付けかわえることができるであろう。これらの商品を流通させるならば、それは、戦争と荒廢のひどい条件に圧迫され、小農業を拡大する可能性がないことに圧迫されて、いまひどく麻痺している小農業を活気づけるであろう。小農民は小農民としてとどまっているかぎり、彼の経済的土台、すなわち小規模な個別経営に応じた刺激、衝動、動機をもたなければならない。ここでは地方的な取引の自由からとびだすことはできない。もしこの取引が、工業製品と交換に、都市、工場、工業の需要をみたすにたりのだけの一定

の最小限度の量の穀物を、国家に提供するならば、経済的取引は回復され、国家権力はプロレタリアートの手にとどまり、つよまるであろう。農民は、その手に工場、工業をにぎっている労働者が農民と取引することができることを実践のうえでしめしてくれるのを要求している。他方では、交通の不便な、広大無辺の広がり、いろいろな気候といろいろな農業条件その他をもった広大な農業国は地方的農業と地方的工業間の、地方的規模の取引の自由を、不可避免的に前提している。われわれは、さきばしりすぎてこの点で非常に多くのあやまちをおかした。われわれは商業と工業を国有化し、地方的取引を停止するという道を、あまりにもさきまですすみすぎた。これは誤りであったろうか？ 疑いもなくそうである。

この点でわれわれは多くのまったくの誤りをおかした。そしてわれわれが度合をまもらず、またどうやってまもったらよいか知らなかったということ、ここで見ようとも理解しようとしなければ、それは最大の罪悪であろう。だがこれもまた必要をよぎなくされたものであった。われわれは、これまで、経済の分野でも軍事的に行動するほかなかったような、激しい、前代未聞の苦しい戦争の条件のもとにくらしてきたのである。荒廃した国が、このような戦争にもちこたえたことは奇跡であった。この奇跡は天から降ってきたものではなく、労働者階級と農民の経済的利害から生まれてきたものであり、彼らが大衆的に奮起してこの奇跡をつくりだしたのである。この奇跡によって地主と資本家にたいする反撃が生みだされた。だがそれと同時に、われわれが理論的にも政治的にも必要とされる以上に、すすみすぎたことは、疑いのない事実であり、このことを煽動・宣伝のうえでかくす必要はない。われわれは、プロレタリアートの政治権力を傷つけないで、つよめながら、かなりの程度に、自由な地方的取引をゆるすことができる。これをどういうふうにやるかは実践の問題である。これが理論的に考えられうることを証明するのが私の仕事である。国家権力をその手ににぎっているプロレタリアートにとっては、なにほどこかの資源があるなら、この資源を流通させ、それによって中農にある程度の満足にあたえ、地方的経済取引にもとづいて中農を満足させることは、十分に可能である。

第 32 卷「ロシア共産党(ボ)第十回大会」(1921 年 3 月 8 日～16 日)

「六 割当徴発を現物税に代えることについての報告 3 月 15 日」P230~233

コメント

「取引の自由とは、商業の自由であり、商業の自由とは、資本主義への後退を意味する。取引の自由や商業の自由は、個々の小経営主間の商品交換を意味する。マルクス主義のイロハなりとまなんだわれわれは、みなこの取引と商業の自由から不可避免的に出てくることは、商品生産者が資本の所有者と労働力の所有者とに分離し、資本家と賃金労働者とに分離すること、すなわち、資本主義的賃金奴隷制が再建されることだということを知っている。」という文章についての青山の見解。

「市場」での「もの」の交換は文化的な生活をするうえで不可欠なものです。「市場」が「資本主義」の決戦の場になるのは、商品生産者が「資本の所有者と労働力の所有者とに分離」しており、商業の担い手が「資本の所有者と労働力の所有者とに分離」しているからです。そして、「商業の自由」のもとに「App Store」のような不当な収奪を許しているからです。生産・販売・市場の組織を社会主義的に組織することが必要。